
SHUFFLE！魔界の悪魔

ワタシは神(笑)だ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SHUFFLE！魔界の悪魔

【著者名】

ZZード

ZZ653S

【作者名】

ワタシは神（笑）だ

【あらすじ】

十年前の悲劇から独りで生きてきた。

誰にも頼らず、ただひたすらに生にしがみついて。

私の気持ちが解りますか？

依頼遂行…そして過去の話（前書き）

他の小説が手詰まつたんで遊び程度で書きました。

まあ不定期更新なんであんまり期待しないで下さい。

後、主人公組大好き派はあんまりお勧めしないです。

依頼遂行 そして過去の話

……何時からだらう……？

人から愛を受けなくなつたのは……

……何時からだらう……？

喜怒哀楽を感じなくなつたのは……

……何時からだらう……？

この「仕事」を始めたのは……

……何時からだらう……？

人を殺してきたのは……

「た……頼む一命だけは……私には妻も子供も居るんだ!」

少々考え方をしていたようですね。私の悪い癖です。ところで田の前には、「仕事」で依頼された、豚のように肥えた男が此方を縋るような目で見てきます。

私の「仕事」というのは……

「始末屋、ジン・クロフォードはただ依頼主の満足のいく結果を提供するだけです。いくら喚こうがそれは覆りません。……解りますか?」

そう「始末屋」これが私の「仕事」です。

依頼遂行までは如何なる手段をも用いて完遂する。これが私の自らに立てた誓い。

依頼の達成率は、ある一件を除けば100%で、請ける依頼は、禁書の始末から軍隊の始末まで様々。

まあ後者はまず依頼されないでしょうが……。

……おつと、また考え方をしていました。ひとつと始末して次の依頼を果たさなければ。

「という事ですので、大人しく死んで下さい。」

そう言うと人差し指を立て、それを男に向ける。

指先に徐々に集まる魔力を見ながら、怯える男に視線を移し、最後にこう言い放つた。

「貴方は裏の実験を知っていますか?」

その問いに男は訳が分からないといった表情を浮かべ、それを確認した後指先に溜まった魔力を解放した。

ヒュン
ブシャア
……

放たれた魔力は視認出来ないほどの速度で男まで辿り着き、頭の顎から上の部位を吹き飛ばした後に霧散した。

「……この忌々しい魔法にも慣れてしましましたね……。それにしても、今回も情報無しとは……まあ期待はしてませんでしたが。」

そう呟くと、踵を返し部屋に点いていた明かりを消し、扉に十字の傷を付け、「よい夢を……」という言葉を残しその屋敷を後にした。

翌日、この事件はその世界を震撼させた。

人は口々にその事件の事を話題に出し、今朝の記事にもそのことが
出されてあり、それにはこう書かれていた。

「魔界大臣暗殺！犯人はまたもや魔界の悪魔！？」

そうとも知らず、ジンは拠点である樹海の深くにある一軒家で優雅
に「コーヒーを飲みながら、次の依頼である書類に目を通していた。

「次の依頼は……これは、懐かしい名を見ましたね……魔界、
神界、人界……それを束ねる事が出来る男……土見稟の、監視及び
暗殺ですか……。」

ひと通り目を通すと、テーブルの上に書類を投げ出し、眉間を揉み
ながら溜め息を吐き、そのまま背を椅子に預け目を閉じる。

……忘れもしませんよ。私が魔界に来たのも、愛を感じなくなつた
のも、感情を表に出さなくなつたのも、人を信じてはいけない事を
教えてくれたのも、きっかけを作ってくれたのは貴方ですからね……。

そんな事を考えながら、仕事の疲れによる眠気に身を委ね、意識を
落とした。

sideジン（十年前）

「おおーーイジン！待てよーー！」

「ンだよ稟ーもうへばつちまつたのか？」

俺達は近くの公園で駆けっこをしながら遊んでいた。

「そうじやなくて、楓と桜が着いてきてないじゃないか。」

肩で呼吸しているが、しつかりした口調で抗議していく稟。しかしその抗議の声は、一人の少々によつて否定された。

「私達ならもうきてるよ？」

「りんくんビリーー！」

氣の陰から出てきたのは、俺や稟とかわらないぐらいの少女。大人

しい方が楓で快活な方が桜だ。

「てなわけで、ビリケツのお前は罰ゲームなー。」

俺は腰に手を当て稟を指差しながら、効果音でドーンーが付きたつ
な勢いで言い放った。

「なー何でだよー!?」

稟は情けない声を上げるが、そんな事は気にせず罰ゲームの内容を
考える。

「んじやー……わかったーお前が俺達に血運出来よいひよー」とをやれ
「！」

全く罰ゲームな気はしないが、それは俺の優しさだ。

「え?……わかったー!ジンでも出来ないよいひよー!」

そう言つと稟はブランコの方に駆けていき、飛び乗った勢いを使い
ながら、立つたままブランコをこぎ始めた。

「りんくん、危ないよ。」

「だ、だめだよりんくん。お願ひだからやめて。」

桜と楓は大きく揺れるブランコを見て、稟に止めるよひよびかけ
る。

しかし稟の表情には自信があり必ず成功出来ることを感じてゐるよ
うだった。

そういうしている内に、地面と平行になるぐらいまで高く上り、前の方に揺れて一番高い位置まで昇った瞬間、稟は勢いよく前に跳んだ。

体を空中に預けた稟を見て、桜と楓は驚きながら田でその姿を追う。

ドサツ

何とか着地したような危ない足取りではあつたが、此方に向けてVサインを向けた。

「あ、あの、ケガとか、ない？」

「大丈夫。全然ピンピンしてるよ。」

桜は賞賛を、楓は心配を稟に送る。

「りんくん、怖くないの？あんなに高いところ飛んで。」

「へへん。全然平氣だよ！」

桜の問いにいい気になつたのか、腰に手を当て、胸を張りながら桜に答える。

「うわーー！本当にすばらしいよね、ジンくん、楓ちゃん？」

桜は興奮しながら俺達に同意を求めてくる。

しかし楓の表情は暗いような、複雑そうな表情だ。

「う、うん……でも、もうあんなことしたらやだよ。」

やはり先程のを心配しているのだろう。

「全然大丈夫なところ、見てもらえたと思つただけだなあ。

ばつの悪そうな顔をして、そう楓に言つ稟。
そんな稟に楓はやや強い口調でまくし立てる。

「だ、だつてだつて、危ないし……もし落つこちたりすれば、死ん

じやうかもしれないんだよ！？」

死んじやつたら、もう会えないんだよー？

わ、私、りんくんと会えなくなるの……いやだもん……。」

「楓は大げさだよ。」

……訳じや無かつたようだ。

楓の心配を余所に、まだ胸を張る稟。

ボカツ

「いたつー！」

そんな稟が少々イラッとしたので、後頭部を殴つてやつた。

「楓が心配してくれてんだから、しつかり聞け！それに何が原因で

悲しい事が起るか分かったもんじゃ無いからな。
楓は全然大げさ
なんかじゃ無いぞ。」

俺がそう言つと、稟も薄々感じていたのか、申し訳無さそうな顔で此方を見てきた。

「でも、今のりんくんかっじよかったよ。やっぱ、わっすが、つていつ感じだつた！」

「 楊ちゃんも、 そ う は 思 た よ わ。 た か ら、 あ ん ま り 強 く 文 句 言 え な い ん だ よ。 」

しかし桜がそう言つて稟を慰め、楓にも同意を求めるが、
「それは……うん。思つちやつた……。」

弱々しくも同意する。

「……はあ……。まあお前にしては凄かつたな。」

やろひと思えば俺も余裕で出来るが、それを言つてしまつとK-Yなので、黙つておく。

「いや、こういふ氣遣いは苦手なんだが……。」

「あれ? 今、何か降つてこなかつた?」

そんな事をしている間に、楓は何やら感じたようで、俺達に聞いてくる。

「あん？」

ポタポタッ

俺の頬にも冷たいものが降りてくる。

「さやあつ、降ってきたー。」

「ビンゴビンゴになっちゃうー。」

急に降り出した雨は、勢いを増し、俺達に降り注ぐ。

「木の下に移動しろー。」

「あの木の下にー。」

俺と稟は、楓と桜を公園で一番大きな木の下に移動させ、そこで息ついた。

「ちよつと、寒い……」

「早く帰らないと、風邪引っちゃうな。」

楓がブルッと体を震わせ、それをみた稟がみんなに聞こえるよう^て咳く。

「雨、どれくらいでやんぐれるかな……」

桜の咳きに俺は空を見るが、雨の強さと風の強さを見ると、直ぐにはやみそうもない。

「へしゃんつ」

「大丈夫か？楓。」

くしゃみを始めた楓を見て、心配の言葉をかける。

「う、うん。大丈夫。ちょっと寒くなつただけだから。」

楓は気丈に答えるが、若干顔色が悪いような気がする。

「走つて帰つた方がいいな。すぐ風呂入つて温まるからな。」

俺の提案にみんな頷くが、楓は何か言いたそうにしている。

「どうかしたか？」

俺はそれを見て、言ひやすひように促す。

「ジンくんは大丈夫？施設まで結構遠いよ？」

今の言葉で解るよう、俺は所謂孤児というものだ。
家もないし、親なんて見たこともない。
しかし生活は施設の園長が助けてくれるので、全く不自由はしない。

おつと話がズレたな。

「まあそうだけど……大丈夫だろ！」

何の根拠もないが、そう言つておく。

「ダメだよ。ジンくんが風邪引いちやうー私の家にきて一緒にお風呂入るうよ?りんくんも一緒にね?」

これは有り難いお誘いなので、遠慮なく乗つておく。

「マジか！ワリイな楓！正直風邪引く覚悟をしてたんだが。」

「それじゃあ、急いで帰ろうか。」

稟の言葉を合図に、それぞれの方向に体を向ける。

うん。それじゃあバイバイ！りんくん、楓ちゃん！」

桜はそう語りうと木の下から駆け出した。

「おひー! またなー。」

うん。 桜もまた来週。 学校で。

ハイハイ 桜ちゃん

別れを済ませた俺達は、楓宅に向けてタッショした。

楓の家で風呂に入つた後、リビングにあがると楓の両親である幹夫さんと、紅葉さんが慌ただしくしていた。

「鉢康は時間にはつるむじからな、晩飯代くらいは出せせりれぬぞ。」

L

「その時は、幹夫くんのお酒代から出しておきまわね。」

「わ、私に被害がつー?」

そんな夫婦漫才を見ながら、タオルで髪を拭き乾かす。
因みに鉢康と言つのは稟の父親だ。

何度も会つてこが、優しさを滲ませてこむよつた雰囲氣を持つて
いる。

因みに、今日から稟の両親と、紅葉さんが旅行に行へりしべ、稟は
その間楓宅…芙蓉家に預けられるらしい。
親同士が仲がいいと便利なもんだな……。
別に羨ましいとは思つていい。

おつと、考え方をしていたら、紅葉さん達がもつ出来るとこだ。

「それじゃあ、行つてきますね。」

「うん。お土産いっつぱい、お願ひね。りんくんと、ジンくんと、
私と、お父さんの分つ

ん?俺?

「いえー!そんな悪いんで、いいです!」

あんまりお世話になるのも悪いので、断つておく。リリ君は孤
児だから解る気遣いと云つものだわ。

「ふふふつ。遠慮なんてしなくていいのよ?」

そつま言われても、俺は何かを貰うのはあまり好きではないのだ。
生きていく最小限のもので満足するのが俺だから。

「いえ、でも本当に大丈夫です。」

「わつ? ジヤあ欲しいものがあつたら、直ぐに言つてね? ジンくん
はもう私達の家族みたいなものだから。」

そう言つて微笑む紅葉さん。

俺は家族と言つ葉に反応して、言葉がでなくなってしまった。

「ジンくん、稟くん。楓のことお願いね。出来ればこれからずっと
ど。」

そう言つて車に乗り込み、窓を開けて幹夫さんを見る。

「明後日には戻りますから、幹夫くん、家のことお願いしますねー。」

」

「ああ、任せとおきなさい。」

「くしゃんっ。それじゃあ、行つてらっしゃーーー!」

走り去つていく車の後ろ姿に手を振つて見送り、家族と言つ葉について考えてみる。

しかしこの後、悲劇が襲つとは、誰も思つて居なかつた。

設定…そして人物紹介（前書き）

まあ暇なら見てみるといいよ

あと面白かったらなんか感想が欲しいよ？

設定…そして人物紹介

ジン・クロフォード

年齢
稟と同じ

身長

180前後

体重

70くらい

体型

それなりに逆三角形
しかしそこまでガッチャリしてゐ訳じゃない
でも筋肉はある

容姿

右目が黒、左目が紅
髪の毛は灰に近い銀色

髪型はブリーチのスタークのような感じ
顔は上の中（一樹や稟を上の上に設定）

左目が、ある実験のせいで瞳孔が開きっぱなしになってしまったので、左目は夜以外はいつも閉じている

魔族

魔力

ある実験のせいで、ネリネ並みにある
制御は魔界、神界問わず最上位と言つても過言ではない

武器

特殊な銃

魔力を弾にし、制御の仕方で麻酔銃から対戦車ミサイルまで威力を
かえられる

魔力で身体能力を上げた体術

備考

魔界に飛ばされてからは、森で生活し、魔獣や大型の肉食獣を糧に
生きてきた。

金を稼ぐためにまずは傭兵になり、名があがると、ある実験のせい
で捕らえられてしまう

ボロボロの状態だったところ、とある少女に助けられ、恩を返すた
め普段は執事の真似事を、裏では始末屋として稼いだ金を、少女に
寄付している家事能力はセージさんなみ

アリストレット・アレイスター
(ジンからはアリストと呼ばれる)

年齢
ジンと同じです

身長

160くらいだったかしら

体重

ジンに言いつけますよ？性格

おつとりしているが、抜けてはいない
ジン以外には毒を吐く事もしばしば
たまに黒さが見え隠れする

容姿

神魔界のプリンセスに引けをとらない

目は両目とも紅

髪の毛

灰色

髪型

カレハの髪型を後ろで纏めた感じ

魔族

魔力

ネリネの半分くらい

制御は完璧だが、回復魔法が苦手

備考

ある一族の末裔

だが、その一族が危険と判断されたため、村を焼き払われた

生き残りは彼女のみ

荒野に倒れていたジンを助けたのは彼女

始めはアリストレットが、恩を売つて自分の手駒にするために助けた
が、次第にジンに心を許し、本人はジン無しでは生きていけないほど
ジンが始末屋をしているのは知っている

ジン・クロフォード
(十年前)

年齢
稟と同じ

身長
145くらい

性格
ガキ大将な部分があるが、どこか大人びている

一人称
俺

容姿

十年後と照らし合わせてくれ

両目とも黒

魔族だが耳が長いことに誰も触れなかつた

魔力

一般人より少しけない

備考

いつもみんなを引っ張っていたリーダー的存在
親がないし家も無いので、施設で育つた

過去の話…そして別れ（前書き）

まあ、続きですね。

どうい

過去の話…そして別れ

「くしゅんっ。くしゅんっ。」

今は楓の部屋に上がっているのだが、楓の体調が悪いようで、くしゃみが止まらない。

「大丈夫?くしゃみ凄いよ。」

稟は楓を心配し、体調を聞く。

「う、うん、大丈夫、だと思つんだけど……ちょっと、はあ……寒いかも……。」

よく見ると、楓の顔は赤くなり、とても苦しそうにしている。

そうしてこの内に、楓は体を床に横たえた。

「楓!」

叫ぶように名前を呼びながら、楓に駆け寄る。

「だ、大丈夫、はあ……だよ……はあ……。」

「楓!?」

「はあ……はあ……はあ……。」

俺は取り敢えず楓をベッドに移動させ、その間に稟に幹夫さんを呼んでくるように頼んだ。

「すまないね、心配かけさせて。楓はどうだい？」

「はい、落ち着いたみたいですね。稟が手を繋いでたら安心したみたいですね。」

幹夫さんは、必要最低限の事をしたあと、俺にその後を任せてくれた。

信頼の証しと思えば、自然と口元が緩んだ。

「そうかい、なら安心だ。

完全に風邪だね。まあ薬も飲ませたし、大丈夫だ。」

ほつとした顔でそう呟く幹夫さん。

そこへ稟が間に割って、入ってくる。

「おばさん達は？」

「ああ、そつちも大丈夫だよ。心配ない。」

そう言われた稟は申し訳なさそうに、

「……ごめんなさい。やっぱり昨日、雨の中を走つたりしたから…

…」

「いや、稟くんのせいじゃないよ。元々風邪気味だったみたいだからね、その状態で無理をした楓が悪い。」

稟が気にしないように、楓のせいにする幹夫さん。

「むしろ、今田ジンくんと稟くんがいてくれて助かったよ。私は看病は本当に下手でねえ…安心なんか到底させられない。君達がいてくれれば、取り敢えずは安静にして休んでいてくれそうだ。」

こういう気遣いが出来るのは、流石だとおもひ。大人って感じで、尊敬の念さえ感じる。

「まあ、この調子なら……」 プルルルル、プルルルル
「おや、電話か。ちょっと待つてくれるかい？」

話を中断し電話を取りに向かう。

「はい、芙蓉ですが……病院、ですか？ いつたい……え？」

そこまでいふと、幹夫さんの顔が引きつり、そして青ざめていく。

「も、もう一度お願ひします！ い、いったい何が！？」

事故……？ 衝突……？

死んだ……？」

幹夫さんは、電話を切ると、病院に行くから準備するように、俺達

に言った。

「残念ですが……」

初老の男性は重苦しい空氣の中、話し始めた。

「そんな……だつて、ケガも何もないんですよ！それがどうして！？」

幹夫さんは普段の冷静さを無くし、男性を責めるようにまくしたてる。

「それに関しましては現在も調査中ですが……現時点では、あらゆる行為に対し、一切反応がありません。

……大変申し上げにくいのですが……植物人間に近いと言えばわかりやすいでしょうか……。身体そのものはまったく問題ないのですが……」

それを聞いた幹夫さんは、今にも掴み掛かりそうなほど力が入っていた身体から力を抜き、男性に一礼してから病院を去った。

しかし芙蓉家に戻つても問題が発生していた。

「楓！ おい、楓つ！ 起きないかつ！」

楓が起きなくなつたのだ。

紅葉さんや、稟の両親の葬式には出たが、途中で倒れ、三日経つ今

でも目を覚まさない。

熱はもう下がっていたが、今度のは風邪とは関係なかつた。

またも病院を訪れ、楓を診てもらつたといふ、

「恐らくは、精神的なものではないかと思われます。

娘さんは、お母さんの死に私達の想像以上の衝撃を受けて心を閉ざしてしまつてゐるのではないかと……」

とのことだつた。

医師の話では、楓は極端な例ではあるが、大切な人を失い、それをきっかけに人が変わつてしまふ例は少なくないそうだ。

楓は、紅葉さんが死んだ事を受け入れられずに、自分を閉ざして逃げようとしている。

そして、このままでは楓も死んでしまうかもしれないと……。

幹夫さんは、顔から生氣をなくし、涙を流しながら医師に何とかならないか聞いていた。

その結果は、可能性の話だが、楓が生きていきたいと思える理由が必要だそうだ。

まだ、楓は助かる。

ある日、桜と俺は楓の見舞いに来ていた。

桜は花束を楓に見えるように差し出すが、楓はそれに反応しない。

必死に語りかける桜の言葉にも、何の反応も示さなかつた。

帰り道、桜は楓の状態を悲しみ、涙を流しながら帰宅した。
一緒に帰る俺は、きっと治る。直ぐ良くなる。と、期待もない言葉
で慰め、歩く事しかできなかつた。

その時俺は誓つた。
楓に理由を作りうつ。

俺と稟は話し合い、楓を怒らせて理由を作ることとした。
しかし俺は気付かなかつた。

俺の考えは大人び過ぎて、稟はまだ子供過ぎた事に……

「楓ー！起きろよー。」

「楓に言つておかないといけないことがあるんだ。」

楓に嫌われても仕方ない。それが楓の生きるためになると思えば、
それでもいいと思えた。

この時稟の様子に気付いていれば、未来は変わつたのだろうか？

「紅葉さんが事故つたのは、本当は帰らなくていいときこそ、無理
に帰らうとしたから起きたんだ。」

「もしあの時、おばさん達が帰らうとしなければ、あの事故は起
なかつたんだ。」

稟と俺は交互に話しながら、話を進めて行く。

「あの時、紅葉さんを呼び寄せたのは……

俺た、「ジンなんだ。」……ち……稟?」

何を、言つてるんだコイツは……?

俺の動搖を無視して、稟の言葉は続く。

「あの日、楓が熱出したことでボク達慌てちゃって……ジンがお父さん達に電話したんだ。

楓が凄い熱を出して大変だつて……そのままじや死んじやつかもつて……。

そうしたら、お父さん達、すぐに帰るからって……いつもよりずっとずっと大急ぎで車を走らせて……それで、事故が起きた……。」

……ああ。稟は怖くなつたのか……。親を失い、その上友達を失うのは、と。

誓いをたてたのは、俺だけで、稟は友達でいることをとつたのか……。

「ジンが、紅葉おばさんを……殺しちやつたんだ……。」

ハハハハ!

笑えるな!

酷く滑稽な道化だよ。

いいよ稟……。仲良くやればいいわ。

元々、俺は……私は一人きりだつたんだから……。

その日から、私達の関係が変わつた。

俺は守りたかったものを手に入れ、人への信頼というものを無くした。

私は、芙蓉楓が退院したことを知つたが、顔を出しに行くことはしなかつた。芙蓉は私との面会など望んではいないでしょうし、土見稟やハ重桜もいるから、まず問題ないでしょ。

ある雨の日、傘を忘れた私は、近くにあつた公園の木の下に避難し、ここで駆けっこして遊んだなあ、なんて事を考えていると、いつの間にか前に楓が立つていた。

雨の中、傘もささずに、幽鬼のような表情で私を睨みながら。

私が気付いた事が分かつたのか、楓はゆっくりと歩き出す。私の田の前までくると、そのまま胸ぐらを掴んだ。

「……」

その田はとても静かで、冷たかった。

「もう一回だけ教えて……

お母さんを殺したの……ジンくんなの？」

強くなつた雨が私達に降りかかる。木の下にいるぐらにじゅあ、雨宿りにすらならない。

「……教えて」

違ひと言えればどんなに楽か……。しかし私は誓つたんです。嫌われても仕方ないと。助けるためならそれも受け入れると。

「ああ。俺が殺した。」

変えた口調を戻し、違和感のないよう「」振る舞。

「そり……なんだ……」

楓の肩が、声が震える

「ジンくんなんか……」

冷たい目がゆづくつと潤む。

「ジンなんか……」

私を掴む手に、さらに力が入る。

「ジンなんか！死んじゃえばいいんだつ……！」

今までに聞いたことのない大声で、楓は叫んだ。

「う……うあ……うう……」

その瞳に涙をためて、涙を零して、私を裏切り者のように睨んでる。いや違う。私は裏切り者になつたんです。私が望んだ通りに。

突き飛ばすように私を離し、背を向けて走り去つていく。
その姿を見ても、悲しみはなく、ただ張り付けたような笑みを浮かべていてるのに気付いた。

ドンッ

ああ……私は壊れてしまつたようです。

その数日後、夜に買い物を園長に頼まれ、人通りの少ない橋の上を渡つていると、またも楓に遭遇した。

あの時と違うのは、明確な殺意と、その手に持つた包丁だろうか。

……誰かに見つからなかつたのだろうか？

そんな場違いなことを考えながら、楓の横を通りうつとする。

しかし、私の望んだ結果にはならなかつた。

楓が肩を掴んできたのだ。

「なんで、貴方が生きてるの……」

「……死ぬような目にあつてないから……だな。」

危うく「ですね」と言つそうになりました。危なかつたです。

「じゃあ、私が……殺してあげるー！」

楓は手に持つた包丁を、私に向けて構え、そのまま突進してきた。

「ドスッ！」

「『ゴフッ……』

包丁は私の腹部を貫き、身体は橋の下へ投げ出された。

落ちていく時、楓の顔に笑みがあるのを最後に、私の意識は暗転した。

目が覚めると、そこは懐かしい感じがする密林だった。

「…………こは……グウ！」

腹部に痛みが走り、視線を向けると、あまり深くないのか、血が止まり包丁も抜けていた。

自分が着ていたシャツは血が付いていたが、それを気にせずゆっくり立ち上がると、周りを見回してみる。

どうやら知っている場所では無いらしい。

包丁を片手に、密林をさまよっていると、周囲に複数の気配があるのに気付いた。

……人間、では無いようですが……
「誰か居るんですか？」

警戒しながらも、気配がある方にそう言つてみる。
しかし、そこから現れたのは、自分の想像を覆すものだった。

「グルルル……」「
「ガラルルル！」

狼のような動物が唸りながら現れた。

明らかに絶体絶命な状況なのに、冷静な自分が居ることに驚く。

包丁を逆手に持ち、腰を落として構える。

一匹の狼は、手に持った包丁を警戒してか、かかって来る気配がない。

それならば、と、自分から突つ込み、包丁を首もとに刺さるようこ振る。

咄嗟の行動に反応出来なかつたのか、僅かに噛みつく動作をしたが、一瞬早く届いた刃が首を抉る。

「ギャウッ……」

狼は痛みに吼えると、急所に入つたのか、そのまま体を横たえた。
もう一匹は、危険と判断したのか、すぐさま逃げ出した。

倒した狼は、すぐさま包丁で解体し、食料に。骨や牙や爪は今後の為に武器としてとつてきた。

……それにしても、リリはなぜいなのか……？

side楓

漸くあの恵々しい奴を排除出来ました。

今私は、誰が見ても期限が良さそうに見えるでしょう。

「只今帰りました。」

自分が帰つても、優しいお母さんの声は聞こえて来ません。
それも全部アッシュの所為です。

「おお、帰つたか。随分と遅かつたじゃないか？」

お父さんは笑いながら私に聞いてきます。

そうだ、お父さんに報告した方が喜んでくれるかも知れません。

「今日せ、とても恥ことことがあったんですよ。」

「わかったのか？何があつたんだい？」

「ふふふ。お父さんが喜ぶ顔が、田に浮かぶよつです。

「ジン・クロフォードを通してきました。」

「…………え？」

その瞬間お父さんの顔が、引きつりました。

「どうしたんでしょうか？」

「か、楓。誰を、どうしたんだ……？」

「聞こえなかつたんでしょうか？
ならもう一度教えてあげなこと。

「ジン・クロフォードを包丁で刺してきました。」

「どうだ…今ジンへんせじーるー。」

「どうしてそんな事聞くですか？あんな奴放つておけば良いこの。田のことで良いで

じゅう？」

「良いから教えなさいー・ジンくんを刺したのはどーだー。」

お父さんの必死な様子に気圧されて、すぐそこの橋の上で刺したのを教えると、家から飛び出して行きました。

慌てる理由が分からず、疑問を抱きながら、お父さんを追います。

「ジンくーんーー、ビードーーー！」

私が追いつくと、お父さんはアイシの名前を呼びながら、橋の下に降りて探していました。

私も下に降りて、アイシの亡骸を確認しようと、その場に向かいますが、どこにも死体がありません。

「楓ー・ジンくーんは、ジンくーんは本当によろこぶのかーー？」

お父さんは、私にアイシの居場所を聞きますが、口にいなにならない。

「口に倒れてる筈何ですけど、居ないですわ。」

パンツ！

軽い調子でそつまつと、お父さんが私の頬を殴りました。

「ジンくんは、お前を助けてくれたんだぞー。」

「……え？」

お父さんが何を言つて居るのか分からず、聞き返してしまつ。

その後、アイツが…ジンくんが何をしてくれたのかを知り、ジンくんに謝るつと思い探しましたが、ジンくんは見つかりませんでした。

ジンくん……ごめんなさい。貴方に謝らないといけないことが、沢山あるんです。

だから……帰つてきて下さい。

田原の……そして田原的達成へ（前書き）

ストックは無い。

書いたら速攻提出が自分のスタイル。

田覚め…そして田的達成へ

…ン

…きて…い

何かが聞こえてくる…「れは…？」

「ジン？起きて下さい。」

優しい声で起こさうとしているのは、彼の雇い主、家族、恩人、そんな言葉が当てはまる少女。

アリストレット・アレイスターである。

「……ん。……ああ、お早う御座います、アリス。」

私は何時の間にか寝ていたようですね。
それにも…随分と、懐かしい夢を見ました。

「おはよう、ジン。お田覚めのキスはいかがかし「遠慮しておきま

す。」……残念。」

このやり取りも、最早日常茶飯事です。
淑女はもう少し、節度をわきまえて欲しいものですね。

「ジン?」

「ええ、すぐに支度しますので、掛けてお待ち下せ。」

名前を呼ばれるだけで、殆ど通じてしまつのも、一緒に生活した時間が長いからでしょうね。

因みに、今支度しているのは、朝食です。

ジユ〜…

食事を準備する間に、アリスに紅茶を用意して出しつけて。

「…ん〜…やっぱジンが淹れたお茶は、美味しいわねえ。」

「アリスやつて美味しそうに飲んでもらえるのが、最高のお礼ですよ。」

「

そんな会話をしている内に、朝食の方が出来上がる。

「お待たせしました。」

作ったのは、サラダ、ベーコンホッギ、カボチャのポタージュ。
まさに朝食という感じの朝食です。

美味しそうに食べるアリスを眺めながら、少々気になつたことを聞いてみる。

「アリス？2日後くらいから、人界に行かなければならぬのです
が……アリスは留守「行きますよ？」……最後まで聞いて欲しかつ
たのですが……。」

仕事の間は、アリスに留守番をして貰うのが、私達の決まりになつ
ている。

しかし、今回のように長期になりそうな依頼は、アリスが付いてく
るかを決めることが出来るのだ。

アリスの家事能力は、こいつ言つては何だが、あまり高いとはいえな
い。アリスの家事能力は、こいつ言つては何だが、あまり高いとはいえな
い。

アリスの家事能力は、こいつ言つては何だが、あまり高いとはいえな
い。

「まあ付いてくるのは良いのですが……余り迷惑をかけないで下さ
いね？」

アリスは私以外の人に、かなり濃厚な毒を吐く場合がありますので
……。過去に、何人か精神的に参らせた事もありますしね。

「酷いですね」。迷惑なんて掛けませんよ？……ジンにちょっとかい
出す雌以外には……。」

……聞こえますよ。

「……」

「……」

「それでは、2日後のこの時間に飛びますので、用意をしていて下
さいね？」

「分かりました」。

その間に、簡単な依頼でも処理しましょう。

一日後、私はアリスの部屋の前で待たされています。
何でも、女性は準備に時間をかけるのが、いい女なんだそうです。
……明らかに出任せでしょうが。

「アリス？ それから飛びますので、早くして下せい。」

「待つて下せい。もう少しで終わりますから。」

何をそんなに時間を掛けるのでしょうか？
男の私には永遠の謎ですね。

ガタガタッ

ドタン！

ガシャバリン！

……ガチャ

「それじゃあ行きましょつか。」

……中で何があつたのか、聞いた方が良いのじゅうか…。

「あまり詮索しないで下さいね？」

「魔法には、心を読むようなものは無かつた筈ですが……」

「何となくです。」

「こりこりう所が恐ろしいと思つ。」

外に出ると、大きな魔法陣が描かれていた。

勿論、私が用意したものですが。

魔法陣の中に荷物を置くと、一人も中に入り、ジンが魔力を解放し始める。

「それでは行きますよ?」

アリスに向けてそう言い、アリスが頷くのを見ると、小さな声で魔法を発動させる。

「飛べ」

次の瞬間、光が辺りを支配し、その光が収まった時、二人の姿は無

かつた。

人界

そこでは一人の少年が惰眠を貪っていた。

「 ズズ～ … ズズ～ … 」

彼の名は土見稟。

十年前に事故で身寄りを無くし、現在は芙蓉家に居候という形で住み込んでいる。

トントン

「 稟くん、起きてますか？」

稟の部屋に語り掛けるのは、芙蓉楓。この家の住民である。稟にとつて、このノックと呼び掛けは、時計よりも正確な目覚ましであった。

「 ん～…。起きてるよ。下で待っていてくれ。」

稟が扉越しにそう言つと、スリッパの音は遠ざかって行つた。

着替えをすませ、身嗜みを整えると、階段を降りてリビングに入る。

「おはようございます。」

「おはよう、楓。」

短く挨拶をして朝食にあつつく。
それが彼の日常。

s.i.d.eジン

転移魔法で移動したのは、マンションの一室。
二人で生活しても、全く狭いと感じない程広い。
この部屋は、依頼が来た後に直ぐに用意した部屋で、家賃はとても
安いとは言えない。

「ふう…。アリス、到着しましたよ。」

無事に到着したことに安堵し、アリスにその顔を伝えるが、田をキラキラさせて周りを見ている。
こちらの話は聞いていないようだ。

「此処が……私達の愛の巣」ではありますよ。……残念。」

危険なワードは出せないで欲しいですね。

「さて、私は対象の学校に入学するわけですが「私も行きますよ?」
……でしょう。前もって、学校には伝えてありますので、準備が出来次第出発しましょう。」

私の準備はもう終わっているので、アリスが終われば出発出来るのですが……

現在時刻 8:50

……遅刻でしょう。

マンションから学校まで、五分も掛からない位置にあるのだが、学校に着いたのは9:40……アリスの準備は時間が掛かるようだ。

二人は制服に身を包み、誰もいない校門をくぐる。昇降口まで行くと、案内図があり問題無く職員室までの道のりを把握できた。

「ユウナイですね。行きましょう……何をしているんですか？」

「ん~? ジンと、腕を組んでるの~」

「あ……先が思いやられますね……。」

「あまり目立つ行動は避けて下さい。」

「誰も見てないんですから、良いじゃないですか?」

全く、ああ言えればいいのに……。

「取り敢えず離れて下さい。ユウナイのまま職員室には入れませんので。」

「分かりました……。それじゃあ、後で沢山しても良いですか?」

早く行きたいのユウナイの際スルーです。

ジンは眉間に数回揉むと、その手で髪をかき上げた。

「早く行きましょう。……時間が惜しいです。」

そつと、先に足を進める。

「ああっ、『めんなさい』置いていかないで下さい、ジン。」

慌てるアリスを後ろに感じながら、ジンは小さく溜め息を吐くのだった。

side稟

楓と登校していると、後ろから殺氣を感じた。

バシン！

「ハッ口～！」

背中に衝撃が走った瞬間、愉快そうな挨拶が聞こえてくる。

「～～～～！亜沙先輩！」

振り向きざまに犯人の名前を叫ぶ。

こんな事をするのは一人しかいない。

時雨亜沙先輩だ。

「ハローー稟ちゃん。今日も一人で御登校？相変わらず仲良いわね～

！」

「で、さつきのは嫉妬な訳ですか……」
ガスン！

今度は頭にカバンの角が命中する。

「今日も一人で御登校？相変わらず仲良いわねっ！」

さつきと同じ台詞だが突つ込む余裕は無い。

「駄目よ？稟ちゃん。女の子はデリケート何だから、もっと優しくしないと。」

……どの口が言ひのだろうか。

「ああーもう行かなくちゃ！一人共、ゴメンねー！」

そう言つて走り出しが、直ぐに戻つてきて、俺の腕を抱き寄せた。

「取り敢えず、殴つたお詫びね。」

その後、本当に走り去つて行つた。

何というか、台風のような人だ。

楓と教室前まで来るが、楓が入る前に制止の声をかける。
そして、俺が扉を開くと、

ガバッ

「おはよう楓ちゃん！俺様の胸の中へ、よしよし！」

「残念……ハズレだ。」

「……稟、俺様の無念の中へよつこそ……。」

いきなり抱きついてきたこの男は、緑葉樹。

顔、運動、頭脳、を兼ね備えた、完全超人……なのだが、女好きが災いして残念な感じになつていてる。

「みんなの邪魔になるから、緑葉君は引っ込むといいのですよ。」

ヒュン……

ギリギリ……

「ま、真弓何を……ギャー！」

突然現れ、樹をロープで縛り上げたのは、真弓＝タイム。魔族と人族のハーフで、赤と青のオッドアイ。

樹とは幼なじみで、こついう漫才は日常茶飯事だ。

そんな二人に挨拶したあと、中に入る。

「稟君おはよう。」

「稟様、お早う御座います。」

先に挨拶してきたのは、神界のプリンセスのリシャンサス。

王女でありながら、庶民じみた生活をする少女だ。

愛称はシア。

次に挨拶してきたのは、魔界のプリンセス、ネリネ。

気品があり、大人しめの少女。

料理が出来ないことが悩みらしい。

「お早う一人共。」

「人は十年前に俺と会っているらしい。らしいというのは、俺がその時の記憶が曖昧だからだ。

だが、それらしい人物と遊んだ記憶があり、一人にその時の事を聞いたら、喜んでいたので、間違い無いだろ？」

二人に挨拶したあと、自分の席に着く。それと同時に、

ガラツ

「ほり席に着け。ホームルームを始めるぞ。」

担任の紅薔薇撫子先生が入ってきた。

みんなからは、紅女史や紅ちゃんなどと呼んでいる。

「えー……今日は転校生が来る……「そんな情報無かつたのですよ！？」うるさいぞ真弓！……来る筈だったが、準備に手こずって、少し遅れるそうだ。」

「真弓」は注意された後も、「私の情報網に掛からないなんて……」とかなんとか言っていたが、席が近い楓に慰めて貰っていた。

樹は、「間違い無く美少女だね。俺様のレーダーが反応しているからね。」と、訳の分からぬ言葉を喋っている。

「まあそういうことで、後から転校生が来るが、授業を妨害しないように。いいな！」

それじゃあ、一時限目は私の科目だから、このまま始めるが。」

そう言つて、ホームルームもそこそこ、紅女史は授業を開始した。

sideジン

静かな廊下を進んでいくと、漸く職員室の札が見えてきた。

「アリス、全て私に任せて良いので、口を開かないで下さいね？」

「これはアリスの毒舌を封じるための言葉だが、聞く人が聞けば、良い思いをしないのは確かだ。

「はいはい。分かってますよっ。」

それはアリスも例外では無く、不機嫌になつてしまつ。

しかしこの不機嫌は演技で、ジンの気を引こうとしているのは、彼にも分かっていた。

ガラツ

「失礼します。」

なので、このスルーも当然の事。

そんなジンに、慌ててついて行き、後に続いて職員室の扉をくぐる。

「今日からこの学園に通うことになりました、ジン・クロフォード、アリストレット・アレイスターです。担当の方はいらっしゃいますか？」

職員室を見渡しながら、それらしい人物を見つける。

「君達が転校生か。今担当の者は居ないから、わたしが代理を勤めよ。」

そう言って現れたのは、三十代後半くらいの男性。

「宜しく御願いします。」「御願いしますわ。」

ジンに合わせ、アリストも挨拶をする。

「うふ、宜しく。早速で悪いが、君達のクラスまで案内しよう。」

彼はそう言つと、一人を連れて歩き出した。

階段を上り、授業の声の聞こえる教室を通り過ぎ、二つ並ぶたりで彼は止まる。

「ちょっと待つてくれ。」

彼は一人を廊下に残し、教室の扉をノックし、出てきた女性と話を始めた。

少し離れた位置なので、声はあまり聞こえないが、読唇術で内容を理解する。

要約すれば、転校生が来たので、紹介の方は宜しく。のよつた感じだ。

話が終わると、男性は引き返していく、代わりに女性が一人を呼んだ。

「私は紅薔薇撫子だ。好きに呼んでくれて構わない。知つてはいるが、君達の名前を教えてくれ。」

話し方から察するに、彼女はなかなか男勝りな部分がありそうだ。

「私はジン・クロフォードです。そして……」

「アリストレット・アレイスターです。紅薔薇先生。」

互いの自己紹介が終わると、紅薔薇先生は頷き、呼んだら入つて来るよう前に言い残すと、教室の中へ入つていった。

扉越しに、いろいろな声が聞こえてくるが、それを紅薔薇先生が一喝し静める。

その声に感心していると、自分達を呼ぶ声が聞こえた。

フフフ……嬉しい事が起きそうですね。

そうでしょう?

土見稟

教室の中に、対象を見つけると、小さく口を歪ませた。

再会、絶望…そして墨田へ（前書き）

……はい。何を言いたいかは、分かってますよ。……神ですからね。

ホンシッシットウに申し訳無い……！

遅れた理由を言わせて貰うと、仕事が忙しいというのが、七割。ネタを思い浮かべていたのが、一割。やる気が無かつたのが一割です。

……あつ！

神に石を投げるなんて！なんて奴だ！

まあそれは氣にしないで、
ゆづくらみていいでね！

再会、絶望…そして明日へ

ガラツ

「しつれ『キヤアアアアア…！』『チクシヨオオオオ…！…！』

教室に入った瞬間この熱氣……。
煩わしい事山の如しですね。

「ジン、何が『ウオオオオオ…！…！…！』

私が入ったときは女子生徒が、アリスが入ったときは男子生徒が、
黄色い声を上げる。

アリスも、この歓声に面食らっているようです。

「静まれ…！」

しー…ん

紅薔薇先生の一喝で、先程のが嘘のように静まり返る。
その中に、あり得ないものをみた顔をしている少女と、目を見開き、
その後目を逸らした少年を見た。

「それじゃあ、自己紹介を頼む。」

先生がそう告げると、二人で教壇の横まで進み、教室全体に響くよ
うな声で名前を言った。

「ジン・クロフォードです。便利屋のようなものをしてこるので、困ったことがあれば言つて下さご。格安で請け負いますので。」

そう言つて、少々頭を下げる。

それに続いて、アリスも口を開いた。

「アリスレット・アレイスターです。好きなものはジン「前世の頃から愛してました!」……。」

田口紹介の途中で湧いて出てきた男に、アリスは田口が笑っていない笑顔を向ける。

「……どなたかしり?」

怒りを押さえたような声に聞こえるのは、やはり付き合いが長いからでしょうか……。

「俺様は緑葉樹。貴女のような美女を一眼見て、俺様の心は、貴女に奪われました!」

緑葉さんは、少々頭がアレですね。……それよりも、アリスが心配です。

「あらあら……緑葉さんといつのですね。まるで、蛆虫のような方ですね~。」

……やつぱり、やりましたね。

アリスは、笑顔できつい毒を吐きますからね。顔に似合わないとはこの事です。

今の一撃で、縁葉さんは「う、ううう…？」と顔面が固まってしまった。トラウマにならなければ良いですね。そんな縁葉さんは、日頃からこういった事をしているのか、誰からも心配されていません。

憐れみの視線を向けていると、一人の少女が声を上げた。

「…」
「…」

元気に立ち上がり、田の前まで近づいて来る少女。

「私の名前は、真弓＝タイム。真弓って呼んでくれていいのですよ。」

そう言って笑顔を向けた後、ポケットからメモ帳のようなものを取り出した。

「それじゃあ、ジン君の方からインタビューなのですよ
まず、名前、身長、体重、好きなもの、の順番でお願いね」

……！」の娘は、生糰のパバラッチのようです。

「名前は先程言つたように、ジン・クロフォードです。身長は、計つてないので分かりませんが、180前後ですね。体重は……約70キロぐらいですかね。好きなことは……朝にゆつたりと紅茶を飲むことです。」

本当は、仕事を達成した瞬間が一番好きですが、それは言つてはいけないでしょ？」

「ふむふむ……成る程……んじゃ、次の質問。彼女は居る？」

「彼女」の単語で、クラスの女子が一斉に静かになる。

「……居ませんよ。恋愛には疎いものでして。」

クラスの女子は、彼女無しの情報に盛り上がり、アリスはジンにしか分からぬ程度に、不機嫌を顔に出した。

「成る程、成る程……。以上で質問は終わりなのですよ！協力してくれてありがとうございます。」

次は、アリスレットちゃんなのですよ。ジン君と同じ感じで答えてねっ。」

ジンへの質問が終わると、標的を代え、アリスに体を向ける。

「私もですか？……名前はアリスレット・アレイスター。身長は160？くらいで、体重は……禁則事項です。好きなものは、ジンの料理です！」

質問された時は、顔に面倒くさいと書かれていたが、何やら思い付いたような顔をし、最後の答えを声の大きさをかえ、強調して答えた。

ジンは顔には出さないが、視線をアリスに向け、「余計なことを……」と言わんばかりの目で見つめた。

当然、クラスは一人には何やら関係があると感じ、視線がジンとアリスに殺到する。

「へえ～ ジン君の、ね～。」

真弓は、面白い物を見つけた田で、一人を交互に見る。

そして、笑みを口元に浮かべながら、次の質問をアリスに向けた。

「それじゃあ、ズバリ！一人の関係はーー？」

その問いに、アリスは一度視線をジンに向けると、笑みを浮かべ、視線を真弓に戻す。

「私達は、恋び「雇用主とその雇われた男です。」……残念……と
いう関係です。」

アリスは恋人同士と答えたかったが、ジンに遮られてしまい、落胆しつつも諦める。

「なんだ～。もっと深い関係かと思ったのに、拍子抜けなのです
よ……。」

真弓はジンの言葉に納得し、期待が外れたことに落胆する。

そんな事を話していると、一人の少女が立ち上がり、ゆっくりと近づいて来た。

「……ジン君……何ですか……？」

「……懐かしい顔ですね。ゆっくり話したいところですが……

「……どなたですか？」

あまり関わるわけにもいかないんですよ。

「つー……覚えて、ませんか？……芙蓉、楓です……。」

その声は震え、今にも泣き出しそうだつた。

「ほ、ほら、十年前に沢山遊ん「失礼ですが。」……え？」

「私と貴女は、今日が初対面ですよ？芙蓉さん。」

楓は、その答えに酷く落ち込み、肩を落とすが、そこにジンが小さな、彼女にしか聞こえない声で囁いた。

「……「俺」が「私」になつてからはね……。」

「つー？あ、貴方は、やつぱり……「ほりー質問はその辺にして、そろそろ授業を始めるぞー……あ。」

彼女は、ジンが人違いでは無い事を察し、ジンに必死の形相で詰め寄ろうとするが、先生に遮られてしまい、敢え無く断念した。

放課後、ジンは楓に呼び出されていた。

それは休み時間のこと、

『あの、ジン君……お話しがあるので、放課後、屋上へ来ていただけませんか?……できれば、一人で…。』

それを聞いていた周りの連中が、煩わしく感じたのは、決して氣のせいではない。

……それにしても……アリスを誤魔化すのには骨が折れましたね。まあ、彼女もあの一部始終を聞いていましたから、訝しげに思われても不思議ではありませんが。

そんな事を考えながら、屋上へ続く階段を昇りきり、扉を開ける。

重々しい音を立てながら開く扉を潜ると、そこには楓と、ジンの標的である土見稟がいた。

「……私には一人でと言ったのに、貴女は複数……不公平とは思いませんか?」

まあ、そんな事は微塵も思つていませんが。

「あの、すみません……。でも、稟君も話したいことがあるそうですが、ご一緒に来つても、構いませんか?……?」

彼女は「」と言つてますが、顔を見る限り、彼女自身も一人きりで話したいことがあつたようです。

まあ、彼が無理に同行を頼んだ、という事でしょうね。

なうば、

「それは許可出来ませんね。」

彼には退場して頂きましょう

「なうーー？ジンーー俺は「貴方の発言を許可した覚えはありませんよ
？」……ジンーー？」

全く、煩わしいですね。

だいたい、人が話をする場に居ること事態が、おこがましい行為と
気づかぬのですかね。

「私は、彼女と話をする為に、此処へ来ました。貴方と話をする為
ではありません。

それとも……「俺」に懺悔か？稟。」

「つーーージンーーー。」

「取り敢えず、消えて下さい。貴方は、この場に相応しく無い。」

「クツ……。」

稟は苦々しく顔をしかめると、ジンの横を通り、屋上から出て行つ
た。

「これでやつて話しが出来ますね。……それで、話とは何ですか
？」

楓は一度顔を俯かせると、直ぐに顔を上げ、決意を秘めた目でジン

を見た。

「……貴方は、ジン君なんですね？」

「……貴女が、どのジンを言つてゐるのかは分かりませんが、十年前……この世から去つたのは、「俺」ですね。」

「……」「な……」「めんなさい……」私、貴方を「それは懺悔ですか?」「え……?」

彼女は、私に何をしようとしているか、分かつてゐるんでしょうか……。

「貴女が今行おうとしているのは、十年前の「俺」の全てを否定する行為ですよ?」

貴女は、幼稚な嘘に気付いてしまつたようですが、それならば分かる筈です。

貴女が謝れば、「俺」はどうなりますか?

貴女を生かそうとした過去は消え、貴女が行った行為も消え、全て無くして、やり直そうとも?

甘い……甘過ぎて反吐が出ます。貴女を助けようとしたのに、それすら無くそうとするなんて……。

貴女は、自分が可愛いんですよ。自分が最も楽な方法をとるうとしている。

「俺」の許しを得ることが、貴女の心を救う唯一のモノだから。

貴女は、自分が良ければ、十年前の「俺」の存在を消しても優先させる、傲慢な女なんですよ。」

楓の瞳からは涙が溢れ出し、頬をつたい落ちた涙は、地面を濡らす。しかし、彼女はそれを拭うことはせず、ジンの言葉に聞き入つてい

た。

「……話はそれだけですか？」

それならば、これで失礼「待って下さー。」まだ何か？

返そうとした踵を元に戻し、視線を向けると、彼女の目には先程とは違った決意を宿していた。

「ジン君……ありがとうございます。」

楓はそう言つと、深く頭を下げた。

「……何のつもりでしようか……？」

ジンの心には、楓の感謝の言葉に対して、疑いしか持たなかつた。今まで生きてきた環境のせいでもあり、彼の仕事柄、油断した瞬間に殺される事などちらにあらからだ。故に、彼は信じなかつた……信じられなかつた。

「ありがとうございます。私を助けてくれて……私の為に傷付いてくれて……そして、生きていてくれて。」

その言葉に、ジンは学園に来て「初めて」表情を変えた。

それは、驚きだけでなく、遠い過去に忘れていた感情に対しても、惑いもあつた。

「私、ずっとと考えていたんです。何でジン君が吐いた嘘に、気付けなかつたんだろ？……何で、ジン君は居なくなつたのに、私は居るんだろ？うつて……」

でも、ジン君のお陰で、気が付くことが出来ました。私がすべき事は、前を向いて、ジン君に会つても、胸を張つて、貴方のお陰で生きることが出来ました、って……貴方に言つことが、貴方に対する最高のお礼だって……。」

……とても懐かしい……。

いつから感じなくなつたのかも分かりません。

お礼を言つのは、

「……私の方ですよ……。」

その咳きは風に消え、楓には聞こえなかつた筈だが、彼女は頬を緩ませ、目を細めた。

「……では私はこれで。

……また明日会いましょう。」

「あ……はい！また明日！」

楓の弾んだ声を背中に聞きながら、ジンは屋上から出て、帰路についた。

「ジン お帰りなさい。

「飯にする？お風呂にする？それとも……わた「貴女は料理が出来ないでしょ？直ぐに作りますので、掛けてお待ち下さい。」……

残念。」

家の扉を開くと、アリスが待っていたかのように抱きついてきた。その後、いつもやり取りをし、彼女を引き離し、キッチンに入ろうとする。

「ジン？ 何か良いことでもありましたか？」

しかし、アリスには隠し通そうとしていた感情に気付かれ、呼び止められてしまう。

彼は、後ろを見ずに、アリスに告げた。

「ええ。懐かしい人と、少しばかり話してきました。」

「……楽しかったですか？」

「はい。……とても大切な物を、思い出せました。」

……「嬉」という感情を……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8653s/>

SHUFFLE！魔界の悪魔

2011年6月8日03時16分発行